

イタリアの日本研究

フォスコ・マライーニ（イタリア日本研究学会会長）

イタリア人は、マルコ・ポーロの有名な『東方見聞録』（Il Milione）の中に描かれた“Cipangu”または“Zipangu”について読んで、初めて日本の存在を知った。13世紀の終わりに極東へ行ったマルコ・ポーロは、日本を訪れなかったが、彼の仕えたモンゴル人からこの国のことを聞いたにちがいない。1274年と1281年に、モンゴル人は二度にわたり日本を征服しようとした。マルコ・ポーロに情報を提供した者たちは、“Cipangu”には黄金が溢れていると考えており、『東方見聞録』の僅かな記述が数世紀にわたり読者を魅了した。クリストファー・コロンブスも、西方の海を渡って西まわりで東方に到達しシナ王国に上陸するという計画を立てていたとき、この一片の情報に大変注目していたと言われている。

日本と西欧が商業的かつ文化的な交流を盛んに進め、ボクサー（C. R. Boxer）教授が「キリスト教の世紀」（The Christian Century）と名付けた1543年から1641年にかけて、日伊関係はますます緊密で現実的になった。当時活躍した優れたイエズス会宣教師の多くは、イタリア人であった。中でも特にアレッサンドロ・ヴァリニャーノ神父（Alessandro Valignano）は、伝道者はキリスト教へ改宗させようとする人々の言語を習得し、出来るだけその習慣に従うという方針を定めた。1583年の『日本における宣教師のための儀典書』（Il Cerimoniale per i Missionari in Giappone）の中の、日本の社会生活の分析と習慣の描写は、彼の大変深い認識を示している。これを読めば、究極的精神基盤に支えられた

日本が、4世紀前も今も殆ど変わっていないことがわかって興味深い。

ヴァリニャーノの方針に従って日本語学習に力が入れられ、九州の天草に印刷所が建てられた。ヴァリニャーノが大きくかかわった最初の日本遣欧使節団（1582-1590）は、イタリアで大きな関心を集めた。不幸なことに、その直後いろいろな理由で、日本は外国人に疑いの念を持つようになり、秀吉が部分的に始めた鎖国政策は徳川家康と彼の後継者たちによってどんどん強められていき、1639年には完全な鎖国が実施された。それでも、ダニエロ・バルトーリ神父（Daniello Bartoli）が当時の数十冊の本や手紙から情報を集めて抄録した有名な著書『日本』（Il Giappone, 1660）は、出版と同時に評判になり、その後数十年間読まれ続けた。

16世紀の終わりに世界旅行中日本に立ち寄ったフィレンツェの商人フランチェスコ・カルレッティ（Francesco Carletti, 1573-1636）が書いた『雑話集』（I Ragionamenti）によって、日本についての直接の情報がイタリアの人々に伝えられた。鎖国政策の実施により、特別に貿易を許されたオランダを除く他のヨーロッパの国々と同様、イタリアと日本の交流はなくなった。もう一人のイタリア人、マッテオ・リッチ（Matteo Ricci）が築いた北京のイエズス会宣教団から時々西欧へ送られるニュースによって、日本の出来事がほんの僅かだがイタリアやそれ以外のヨーロッパに伝わったが、反響は殆どなかった。六年間江戸に囚われていたジョヴァンニ・バティスタ・シドッティ神父（Giovanni Battista Sidotti, 1668-1715）の悲運は、明治維新後に知られるようになった。イエロニモ・デ・アンジェリス神父（Ieronimo De Angelis, 1568-1623）の行った驚くべき蝦夷旅行記や彼の手紙、それに彼の描いた北方領土の地図は、最近までローマのイエズス会の古文書館に埋もれていた。

19世紀のイタリアと日本の歴史には、いくつかの重要な類似性がある。両国で宿命的な大革命が起こった。イタリアは独立を勝ち取り、1870年には完全に統一された。日本は1854年に鎖国政策を放棄し、1868年に封建主義から君主支配政治に移行した。それゆえ、再び両国がお互いに関心を持ったのは当然であった。多くのイタリア人が主に芸術分野の専門家〔ラグーサ (Ragusa)、フォンタネージ (Fontanesi)、キオッソーネ (Chiossone) など〕として、日本に招かれた。しかし、例えば法律の権威であるパテルノストロ (Paternostro) のように、他の能力のために招かれた者も何人かいた。同時に、多くの日本人がイタリアを訪れた。特に忘れてならないのは岩倉使節団で、その報告書にはわが国についての広範囲にわたる記述がある。

イタリア海軍の軍艦マジェンタ号 (H.M.S. Magenta) が、日伊通商条約が初めて締結された1866年に日本を訪れた。遠征に加わった士官のアルミニョン (V.F. Arminjon) が後に『日本：1866年の軍艦マジェンタ号航海記』(Il Giappone, e il viaggio della corvetta Magenta nel 1866) を書いた。これは日本を直接に見た人物の報告書であったので、イタリア人に広く読まれてかなりの影響を与えた。養蚕業が当時両国にとって重要産業だったことも、交流が深まった理由である。

次に日本に関する学問的研究についてであるが、フィレンツェが数十年間その中心であったことは興味深い。1863年以来、アンテラモ・セヴェリーニ (Antelamo Severini, 1827-1909) が王立高等研究所 (後のフィレンツェ大学) の極東言語の教授であった。セヴェリーニはパリのスタニスラス・ジュリアン (Stanislas Julien) とドゥ・ロニー (De Rosny) の下で学び、日本の文化に大変興味を持った。セヴェリーニは日本の本をイタリア語に翻訳した。その中には『竹取物語』(1881) や柳亭種彦の

『浮世方六枚屏風』（1872, 1876-77）がある。一方、彼は日本語の詩、特に韻や修辞の面に注意を向けたり、日本の道教や占星術も研究した。彼の著作のいくつかは、当時的大陸とイタリアの東洋研究家の仲介役として活躍したフランチェスコ・トゥレティーニ（Francesco Turretini, 1845-1908）の監修で1871年から1881年までスイスのジュネーブで発行されていた「あつめぐさ」という雑誌に発表された。セヴェリーニは1876年に当時の重要な学術誌となった『イタリア東洋学雑誌』（*Bollettino Italiano degli Studi Orientali*）を創刊した。セヴェリーニの後任として、彼の弟子カルロ・プイーニ（Carlo Puini, 1839-1924）が東アジアの歴史と地理の教授に任命された。プイーニは主にアジア大陸に関心を持ち、イッポリト・デシデーリ神父（Ippolito Desideri）によって1712年から1733年にかけて書かれ、その後不幸にしてイエズス会の古文書館に埋もれていたチベットについての重要な本を、初めて編集出版した。しかし、プイーニは日本についてもいくつかの論文を書き、「七福神：日本人の宗教礼拝についての試論」（*Seven Gods of Happiness: Essay on a Portion of the Religious Worship of the Japanese*）がアジアティック・ソサエティの会報（vol. VIII, 1880）に掲載された。

初期フィレンツェの東洋研究家の中で最後に注目すべき学者は、極東言語文学の教授、アルベルト・カステラーニ（Alberto Castellani, 1884-1932）である。中国語が彼の主な研究分野で、『道徳経』や『論語』は彼によってイタリア語に訳された。しかし日本に関する論文もいくつか書き、後に『極東の文学と文明：研究と評論』（*Letterature e Civiltà dell'Estremo Oriente: Studi e Saggi*, 1933）という本にまとめられた。

フィレンツェの学会が、1924年以来日本との接触を持たなくなったことは残念である。1920年代および30年代には、唯一、矢代幸雄のイタリ

アルネサンス、特にボッティチェリの研究が接点になっただけである。やっと1972年になって、日本語と日本文学課程が再開された。フィレンツェ大学文学部の図書館は、セヴェリーニやプイーニの時代からある数冊の書物を何とか保存しているが、大部分は中断した数十年の間に紛失したり盗まれたりした。

1876年にローマ大学で日本研究が始まり、カルロ・ヴァレンツィアーニ (Carlo Valenziani, 1831-1896) が東洋言語の教授に任命された。ヴァレンツィアーニは特に日本の演劇に関心を持ち、浄瑠璃や狂言について多くの論文を発表して、これらの演劇とそのテキストをイタリアの人々に紹介した。長年にわたり、たくさんの中国語および日本語の本がローマの国立図書館 (Biblioteca Vittorio Emanuele) に収められていた。ヴァレンツィアーニはその目録を編纂した。ルドヴィコ・ノチェンティーニ (Ludovico Nocentini) が、1899年にヴァレンツィアーニの跡を継いだ。彼は優れたシナ学者であったが、日本をテーマにいくつかの論文を発表した。

20世紀初頭のローマ大学では、東洋研究は特に中国語とサンスクリット語に集中していた。1926年以後、ジュゼッペ・トゥッチ教授 (Giuseppe Tucci, 1894-1984) は多くの著作を出版し、チベット学者として国際的に有名になった。彼の影響で東洋研究は重要性を認められ、脚光を浴びるようになった。優秀な弟子達がたくさんの新しい講座を開いたが、少し残念なことにトゥッチ教授は日本研究にわずかな関心しか示さなかったため、研究においても教育においても他の東洋研究の分野が優先された。

イタリアの現状を調べるためにあとでローマに話を戻すが、その前に少しナポリに目を向けたい。このイタリア南部の有名な都市は、東洋研

究、特にシナ学では古い伝統を持っていた。さかのぼること1732年に、マッテオ・リーパ神父 (Matteo Ripa) がキリスト教に改宗した将来有望な若い中国人のために一種の大学院を目指した Collegio dei Cinesi を創立した。いろいろな理由でこの最初の計画は実現せず、Collegio は次第に衰退していった。創立から156年後の1888年にナポリ大学に吸収され、結局文学哲学部と政治学部の二学部を持つ現在の大学付属東洋研究所 (Istituto Universitario Orientale) になった。ここには現在アジアの国々の歴史・哲学・文学・社会学の授業と共に、日本語・中国語・ヒンドゥー語・ペルシャ語などの東洋の言語課程が設けられている。図書館の設備は素晴らしく、日本語は特に日本史が充実しており、歴史資料の出版物が自由に利用できる。また重要な年報 (Annali dell'Istituto Orientale Universitario di Napoli) を発行し、現在45巻に達している。

ナポリ大学は1903年に日本語課程を開設し、ジューリオ・ガッティノーニ (Giulio Gattinoni) が数年間教授を務めた。ガッティノーニは『日本語の口語文法』(Grammatica della lingua giapponese parlata, 1890)、続いて『日本語完全講座』(Corso completo di lingua giapponese, 1908) を出版した。ガッティノーニの跡を継いだのは傑出した人格の持ち主で、トッディとしても知られているピエトロ・シルヴィオ・リヴェッタ (Pietro Silvio Rivetta) である。彼は教授であっただけでなく、ジャーナリストであり日本文化の熱心な紹介者であった。1911年からリヴェッタは寺崎 [たけお] と共に『日本語口語文法の実用と理論』(Grammatica teorico-pratica della lingua giapponese parlata) を出版していた。リヴェッタは長年にわたり新聞・雑誌に記事や論文を載せた。『日本語の手引：難解日本語の会話・書き方のやさしい入門書』(Nihongo no tebiki: Avviamento facile alla difficile lingua giapponese parlata e scritta,

1943) は、晩年の著書の一つであり、おそらく最高のものである。

リヴェッタ (あるいは日本人の友人たちにとってはリベッタ) がナポリで公職についていたのはわずか三年 (1910-1913) であった。彼の後任は同様に傑出した人物のバルトロメオ・バルビ (Bartolomeo Balbi) で、1920年まで教授職にあった。リヴェッタが豊かな教養を身につけた愉快で感じの良い人文主義者であったのに対し、バルビは東京のイタリア大使館付き武官をしばらく務め、日本の武士道や武道を熱烈に賛美していた。彼は初め言語を研究していた。ここでは次のものを挙げておく。『動詞から入る日本語の初歩実用練習』(Prime lezioni pratiche di lingua giapponese completate da un breve studio sul verbo, 1910)、『伊和辞典』(Piccolo vocabolario-manuale Italo-Giapponese, 1911) [これは後に『日本語の文法と語彙』(Grammatica e vocabolario della lingua giapponese, 1939) になり、1976年にチサルピナ・ゴリアルディーカ (Cisalpina Goliardica) によって再版された。]

バルビは、桜井忠温の『肉弾』の翻案によって一般的に広く知られるようになった。この作品は日露戦争での感動的で英雄的なエピソードを扱ったもので、1906年に日本語で出版され、1913年にバルビの翻訳が出た。バルビは日本語の小説や詩の翻訳に力を入れる一方、「孝行往来」や「武士道」について書いた。

バルビがナポリ東洋大学での職を退いた後、再び強い個性を持った下井春吉がその地位を継いだ。下井は日本人ではあるが、国籍離脱者だと言ってよい。学者というよりは詩や文学の愛好者であり、強い右翼的政治思想を持っていた。詩人のダヌンツィオ (D'Annunzio) が第一次世界大戦後にフィウメ (現在のユーゴスラビアのリエカ) を占領した時、下井は彼に追従した仲間の一人であった。詩人や学生 [ジェンコ (E.

Jenco)、ダヴィデオ (V. Davideo)、コルッチ (A. Colucci)、ヴィジアーニ (R. Vigiani) など] の中心になって、下井は「桜：極東の美術と詩についての現代ヨーロッパ初の評論」(Il Ciliegio: Prima rassegna moderna europea dell'arte e della poesia dell'Estremo Oriente, 1920) という雑誌を創刊した。「桜」は長くは続かなかったが、近代日本文学をイタリアの一般の人々に紹介したことで重要である。「同時に下井は、近代および近代以前の日本文学の翻訳や評論を集めた『満開の桜の枝』(Rami fioriti di Sakura) のスポンサーになった。」[アドルフォ・タムブレロ (Adolfo Tamburello) 教授の「イタリアにおける日本研究」という貴重な論文からの引用。] 下井が1924年に帰国したあと、彼の弟子のロドルフォ・ヴィンジアニ (Rodolfo Vingiani) が跡を継いだ。

ヴェニス的高等商業学校でも、あきらかに実用を目的として日本語が少し教えられていた。アウグスト・コッティン (Augusto Cottin) は1886年に『日本語の基礎知識：学術的解釈』(Nozioni sulla lingua giapponese: Letturaaccademica) を出版していた。

この時期のフィレンツェ・ローマ・ナポリ・ヴェニスに限って言うなら、学問の世界以外でも日本文化に対する関心が広まる兆しがあった。ヴァティカンでは日本との交流を再開し、プティジャン (B. PetiJean) 神父の監修で1870年に古い羅和辞典 (Lexicon Latino-Japonicum) を復刻した。19世紀から20世紀の過渡期に出版された重要な著作を挙げておく。

1895：ベルタッキ (Bertacchi)、『日本書誌』(Bibliografia del Giappone)

1897：プロタ・ジュルレオ (Prota-Giurleo)、『日本語の完全講座試論』

(Saggio di un corso completo di lingua giapponese)、ナポリ

1900：田中松太郎、『日本の14世紀のある文人』(Un trecentista giapponese)、("Rivista d'Italia", No. VIII、吉田兼好の紹介文が

付いた『徒然草』の翻訳)

1905: マニャスコ (Magnasco)、『口語日本語: 文法要素と用語解釈』
(Lingua giapponese parlata: Elementi grammaticali e glossario)、
ミラノ

1910: キメンツ (Chimenz)、『伊和小辞典』(Piccolo dizionario italia-
nogiapponese)、『現代会話案内』(Guida di conversazioni mo-
derne) [この二つはミラノのホエップリ (Hoepli) によって
“Manuali Hoepli” という有名なシリーズに入っている。]

当時の何人かのイタリア人作家の作品には、日本文学の影響が見られ
る。例えば、マリオ・キーニ (Mario Chini) やマティルデ・セラオ
(Matilde Serao) やマリネッティ (F.T. Marinetti、未来派の創設者) の
名が挙げられる。日本の民話はこの分野における著名な研究者、例えば
ジリオリー (H. Giglioli) やピトゥレ (M. Pitre) やボアーリ (E. Boari)
などの関心をひいた。日本史は、アッコリート (G. Accolito) やボエロ
(G. Boero) やスフォルツァ (G. Sforza) やベルケット (G. Berchet)
によって、おもに宣教活動に関連して研究された。ブンコンパーニ・ル
ドヴィシ (F. Bouncompagni-Ludovisi) は特に日本最初の遣欧使節 (1582-
1590) に注目した。

ラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn) の著作の幾つかは、バリの
ラテルツァ (Laterza) 社によってイタリア語に翻訳出版された。以後
の版はフィレンツェでは Varecci 社、ヴェニスでは Estremo Oriente 社か
ら出版された。

日本美術を最初に研究したのはヴィットリオ・ピカ (Vittorio Pica) で
あった [『極東美術』(L'Arte dell'Estremo Oriente, 1894)]。日本に
住んだこともあるエドゥアルド・キオッソーネは明治政府お雇いの画家

として働き、版画・絵画・銅像・漆器・鐔などの素晴らしいコレクションを故郷のジェノヴァに遺贈した。キオッソーネは文字どおり二束三文で古い作品を売り払っていた時期に日本に滞在できて、非常に運が良かった。彼の浮世絵のコレクションは、やがてヨーロッパの最も素晴らしいものの一つになった。それは幾つかの変遷を経て、現在ジェノヴァの中心地に近い小さい近代的なキオッソーネ博物館 (Museo Chiossone) に収められている。

イタリアでは、第一次世界大戦直後に東洋学が始まった。ジュゼッペ・トゥッチ教授は1933年に、イタリア中・極東学研究所 (Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, IsMEO) をローマに設立した。IsMEO は「紀要」(Bollettino) と「アジアチカ」(Asiatica) を発行した。両誌とも日本に関する論文、特にカスターニャ (G.C. Castagna) やメルジェ (S. Merge) やストウラミジョーレ (G. Stramigiole) やマライーニ (F. Maraini) などのために誌面をさいた。時々トゥッチ教授も日本に関して書いた [『日本：歴史的伝統と美的伝統』(Il Giappone: Tradizione storica e tradizione artistica, 1934)]。彼はまたジャチント・アウリーティ (Giacinto Auriti) 大使とリヴェッタと共に日本友好協会 (Società degli Amici del Giappone) を組織し、「大和」(Yamato: Mensile italo-giapponese, 1941-1944) を発行した。

同じ頃、著名な宗教史の権威であるラファエレ・ペッタゾーニ教授 (Raffaele Pettazzoni) が「古事記による日本の神話」(La mitologia giapponese secondo il libro del Kojiki, 1929) という素晴らしい論文を発表した。彼の有名な『懺悔』(La confessione dei peccati, 1929) には、日本の思想に関する論文が入っている。日本で活動していたイタリア人宣教師のマリオ・マレガ (Mario Marega) は、1938年に『古事記』を

翻訳した (Ko Gi Ki: Vecchie Cose Scritte, Libro base dello shintoismo giapponese: 最近再版された)。彼はまた『伝説と寓話の日本』(Il Giappone nei racconti e nelle leggende, 1939) と『忠臣蔵』(Il Chushin-gura) を出した。マレガ神父の業績の中には、奈良のお水取りに関する論文や切支丹の研究、「ラテラノ年報」(Annali Lateranensi) 1939年Ⅲ号掲載の「大分県のキリスト教徒の回想録」(Memorie cristiane della regione di Oita) がある。

オレステ・ヴァッカーリ (Oreste Vaccari) は、1934年に教師・辞書編纂者・出版者としての長く立派なキャリアを東京で開始した。『日本語文法：理論と実用』(Grammatica della lingua giapponese: metodo teorico-pratico, 1934、以後版を重ねる) は、数十年にわたり標準的なテキストとして広く使われた。ヴァッカーリと彼の日本人の妻 Enko は、イタリア人の学生だけでなく他の国の人々のために英語で新しい文法書・辞書・漢字カードを作って、精力的に仕事をした。

第二次世界大戦中の日伊同盟は両国の出版活動をますます盛んにしたが、その多くは基本的に政治宣伝であった。今日では、主に社会学方面に関心が集まっている。日本研究に大変貢献していると思われるものとして、スカリーセ (G. Scalise) の『軍事用語付き伊和辞典』(Dizionario Italiano-giapponese, con un'appendice dei termini militari, 1940) を一つ挙げておく。

第二次世界大戦後、イタリアの日本研究は著しく後退し、ナポリの日本語科教授職だけが辛うじて残った。幸い実に優れた日本学者であるマルチェロ・ムッチオーリ (Marcello Muccioli) が1938年以後この職にあった。彼はすでに1930年に『方丈記』(Lo Hojoki di Kamo no Chomei) を翻訳していた。1942年にローマで『日本帝国』(L'Impero Giapponese)

を、1949年にはミラノで『神道：日本の国家宗教』（Lo Shintoismo, la religione nazionale del Giappone）を、さらに1950年にはフィレンツェで『百人一首』（La centuria poetica）の翻訳を出版した。彼の主な著書は日本の演劇を扱った『日本の演劇：歴史と作品』（Il teatro giapponese: storia e antologia, 1962）で、これは大変すばらしい研究であるが、残念ながら英語に訳されなかったため、ふさわしい数の読者を得るには至らなかった。彼は『方丈記』以外に1965年に『徒然草』の翻訳を出した。最後の著書は『古典様式に見られる日本語の書き方の形態論』（Morfologia della lingua giapponese scritta con particolare riguardo allo stile classico, 1970）であった。ムッチオーリ教授は非常に活動的で、一連の論文や抄訳を学術誌に寄稿し、数々の百科辞典の日本および日本文化の項目を担当した。その中には『トレッカーニ百科辞典』（Enciclopedia Italiana Treccani Razze e popoli della Terra）、『作品と人名辞典』（Dizionario delle opere e dei personaggi）、『東洋文化』（Le civiltà dell'Oriente）などがある。

戦争直後、アウリーティ大使は外交官を引退した後、ローマ大学でしばらく講義を行った。彼もまた日本の文化史、『古代から明治維新までの日本文化概論』（Compendio di storia della cultura giapponese dall'età arcaica alla restaurazione Meiji）を1948年に発表し、広く読まれた。アウリーティは貴重な日本を含む東洋の銅像のコレクションを、トゥッチ教授が創設した国立ローマ東洋美術博物館に寄贈した。

1957年にマライーニは『現代日本』（Ore Giapponesi）を出した。この本のおかげで若者の間で再び日本への関心が興り、その中から今日の優秀なイタリア人日本研究家が輩出したと言われている。これは英語（Meeting with Japan）・フランス語・ドイツ語・スペイン語に訳され、

アメリカでは1961年一月に「今月の本」に選ばれた。

イタリアでは50年代・60年代に日本研究が再燃した。「ナポリ東洋研究所年報」(Annali dell'Istituto Orientale di Napoli)や雑誌「東と西」(East and West, IsMEOの季刊誌)には、しばしば日本に関する論文や評論が載った。IsMEOの日本文化センターは、マリオ・テティ(Mario Teti)の監修で隔月誌「Cipangu」を出した。しかし「Cipangu」は1957年で廃刊になり、代わって年報「Il Giappone」が発行され、現在タンブレロ教授の監修で20巻に至っている。

現代日本文学は、多くの有能な翻訳家によって一般のイタリア人の注目を浴びるようになった。ジュゼッペ・モリキーニ(Giuseppe Morichini, 1894-1959)は大岡昇平や花山信勝の作品を紹介した。あつ子・ロッカ・すが(Atsuko Rocca-Suga, イタリア人と結婚した日本人女性)は、たくさんの日本語の短編小説を訳した。その他スカリーゼ(G. Scalise)やテティやカニョーニ(P. Cagnoni)やオリグリーア(L. Origlia)が翻訳を手掛けた。アドゥリアーナ・ボスカロ(Adriana Boscaro)は『秀吉の百一の手紙』(1975)や遠藤周作の小説を訳している。

1962年に日本政府は日本文化会館をローマに開設し、以来あらゆる分野にわたって日本についての知識の普及にあたってきた。会館には充実した日本関係書の図書館があり、常に新しい補充が行われている。

イタリアの各都市では日本研究の新しい機関が次々できた。IsMEOはミラノに分館を作り、スカリーゼ、続いて息子のマリオ・スカリーゼ(Mario Scalise)教授が所長を務めている。マリオ・スカリーゼは『漢字辞典』(Dizionario dei Kanji, 1962-1966)と『日本語実用講座』(Corso pratico dilingua giapponese, 1966)を出した。

パヴィア大学の新任教授、パオロ・ベオニオ・ブロッキエリ(Paolo

Beonio Brocchieri) は徳川時代の思想に多大な関心を持っている。彼の『現代日本の起源における宗教とイデオロギー』(Religiosità e Ideologia alle Origini del Giappone Moderno, 1964) は、イタリアの日本研究に新しい一ページを開いたと言われている。ブロッキエリは、また『日本の政治の動き』(I movimenti politici del Giappone, 1971) の中で日本の政治を鋭く分析して見せた。

1960年以後、日本の現代史や経済にも大きな関心が寄せられるようになった。ジョルジョ・ボルサ教授(Giorgio Borsa、ミラノ)は、『極東問題』(I problemi estremo orientali 1870-1941, 1959)や『二つの世界にはさまれた極東』(L'Estremo Oriente tra due mondi, 1961)などの重要な研究を発表した。ミラノのボッコーニ大学にいた故ガスパリーニ教授(I. Gasparini)は、同大学のフォデラ(G. Fodella)とともに1973年に東アジア経済・社会研究所を設立した。当研究所は日本経済に関する特別課程を設け、多くのセミナーを開き、雑誌を発行している。この分野における著書に次のものがある。

ステファノ・ベリエニ(Stefano Bellieni、ナポリ大学、昨年若くして急逝)、『全学連・全共闘』(Zengakuren-Zenkyoto, 1969)

フランコ・ガッティ(Franco Gatti、ヴェニス)、『日本のモデル：実証資本主義』(Il Modello Giapponese: il capitalismo alla prova, 1976)と『現代の日本』(Il Giappone contemporaneo 1850-1970, 1976)

1972年に日本ペンクラブが京都で日本研究家大会を開いた時、イタリア人の学者や学生がたくさん参加した。そこで彼らの活動をまとめる組織作りが提案された。その後1974年に「イタリア日本研究協会」(Aistugia)がローマに設立された。マライマライーニは初代事務局長、後に所長に

任命された。Aistugiaには現在約120名の会員がいる。毎年異なる都市で年次総会が開催され、論文の発表と討論が行われる。会報の「Atti」はこれまで八冊刊行されている。

現在少なくとも14機関で日本語教育が行われ、ボローニャ・フィレンツェ・ジェノヴァ・ミラノ・ナポリ・パヴィア・ピサ・ローマ・トリノ・ウルビノ・ヴェニス の11の国立大学で日本の関心を引く課程が設けられている。また、私立のボッコーニ大学やローマとミラノの IsMEO でも各種の課程がある。

(1988年5月)